



〈公開〉生と死に寄り添うⅡ

□会場 東洋英和女学院大学大学院
(六本木) 201教室
東京都港区六本木5-14-40

□最寄駅 六本木駅(日比谷線徒歩10分)
麻布十番駅(大江戸線徒歩5分、南北線徒歩7分)
□先着 100名様

□参加費 各回500円
本学院在校生・教職員無料
□事前申込み 不要

第9回連続講座

2017年 1月 14日(土)
14:40-16:10 (受付14:10~)

■プロフィール

上智大学大学院博士後期課程満期退学。産業医科大学講師、山口大学医学部教授、京都工芸繊維大学大学院教授などを経て現在、本学人間科学部教授。前日本生命倫理学会代表理事・会長。本大学院において死生学を担当。

■主要業績

『日本におけるカルチュラル・バイオエシックスの可能性』『人間科学研究会 生と死』第15・16号合併号、2015。「『全能性』倫理基準の定義をめぐって—再生医療とくにiPS細胞研究の場合—」森下他編『生命と科学技術の倫理学—身体・心・ロボットの未来』丸善、2015。「小さな死によせて」『死生学年報 2016』リトン、2016。『生命倫理学と死生学の間—「生命」の何が問われているのか—(仮題)』東信堂、近刊。

大林 雅之 (おおばやし まさゆき) 本学人間科学部教授

老いにおける性と死

内容紹介：

超高齢社会となった日本社会では、高齢者の介護現場における同性介護の原則に限界があり、性的虐待が問題視されています。また、高齢者の性行動をめぐっては「困った問題」としての対応や、メディアによる過度に挑発的特集記事などがあり、高齢者の「性」は高齢者の尊厳を著しく損ねた扱いがなされています。本講演では、そのような状況に対して、「死」に向かう老いを生きつつ、「性」として生きる高齢者にとっての「性」と「死」の意味を、その関係性に注目しながら考えてみたいと思います。

第10回連続講座

2017年 1月 14日(土)
16:20-17:50

■プロフィール

1976年東京大学文学部倫理学科卒、1983年同大学院博士課程単位取得退学、1987年から浜松医科大学にて研究・教育に従事。研究分野は倫理学、生命倫理学、医学哲学、形而上学、近代日本哲学。独自のシステム理論に立って哲学の体系化を企図中。

■主要業績

『生命と科学技術の倫理学—デジタル時代の身体・脳・心・社会』丸善出版、2016。『生命倫理学の基本構図』丸善出版、2012。『水子—(中絶)をめぐる日本文化の底流』青木書店、2006。『健康への欲望と(安らぎ)—ウエルビカミソクの哲学』青木書店、2003。『健康の本質』時空出版、2003。『「生きるに値しない命」とは誰のことか—ナチス安楽死思想の原点を読む』窓社、2001。ほか

森下 直貴 (もりした なおき) 浜松医科大学医学部
総合人間科学講座教授

老人世代の働き方 —老成学からの視点

内容紹介：

死生学の対象は主にく病いの中の死＞ですが、人間の死にはく老いの中の死＞もあり、むしろこちらの方が日本社会では一般的です。他方、私が提唱するく老成学＞では老人年代の生き方に注目します。老成とは老いの完成ではなく、老いを不断に問い直すという意味です。老人の生き方は今日、老人世代の社会への再関与というかたちで問われています。しかし、その再関与の延長線上に死が位置づけられないかぎり、老成学もまた完結しません。本発表では、く老いの中の死＞を焦点に、老人世代の社会的再関与を通じて形成される死生観について、私なりにその枠組みを描いてみます。

〈予告〉2月18日(土) 連続公開講座「生と死に寄り添うⅡ」

第11回 関 智征「終活と生きる力」

第12回 福田 周「山頭火—生涯と俳句からみた生と死の表現」



東洋英和女学院大学死生学研究所
shiseigaku@toyoeiwa.ac.jp
03-3583-4035 (fax専用)